

013606-000-1

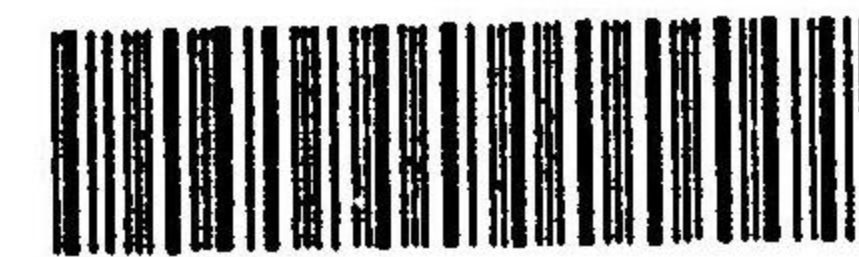
97-254

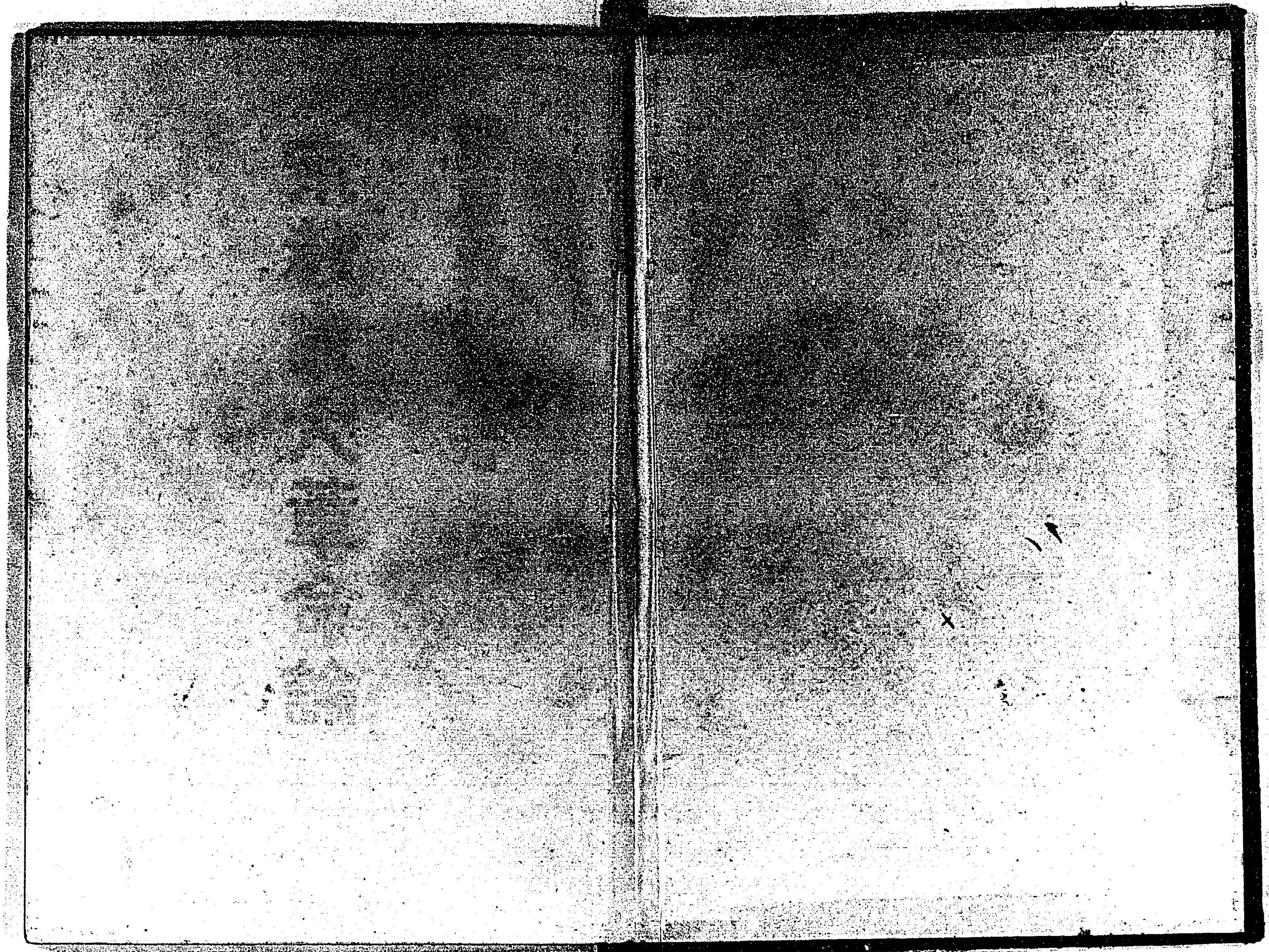
宗教家大革命論

堂屋敷 平民(竹次郎) / 著

M38

ABA-0075

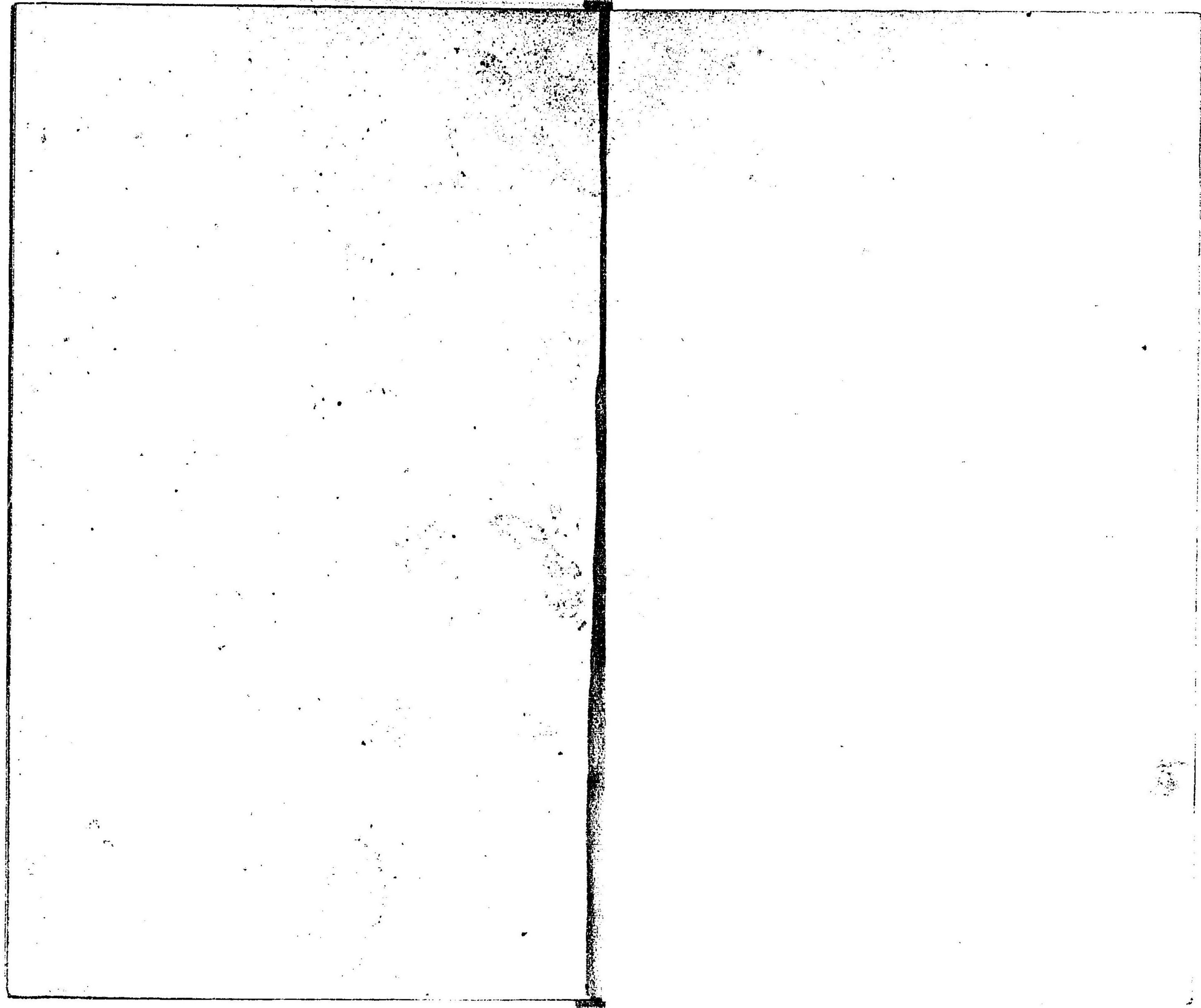




97
251

堂屋敷平民著

宗教家大革命論



21/214

仰いで天空を望めば、

序

依然として舊時の美観を呈せり、俯して現今の僧侶を見る、亦何處にか満身の熱血を以て、布教濟度

ある親鸞ある日蓮ある。彼の法然親鸞日蓮は、曾つて一度流罪の身となり、爾來天下は幾變遷、星霜亦幾百返、今や堂々たる管長にして收監せらるゝあり、大僧正にして獄裡に呻吟せらるゝあり、時を隔つる六百年、其狀彷彿たるものあるが如し。雖も然も彼の法然親鸞日蓮

内交

の流刑せられたるは、忌む可き詐欺取財の爲めには非りき、恐る可き私印偽造の爲めには非りき、吾人は遠く六百年前を回顧し、今や頻繁陸續として、收監せられつゝある状態に想倒して、轉た無量の感慨なくむばあらず。

若夫本編の如きは、僅かに改革の一斑を序したるに過ぎざるも、亦爲めに幾分覺醒の端緒となるを得ば、著者の幸福之に過ぎざる也。

明治三十八年二月京都の寓居に於て

著者 堂屋敷平民誌す

例言

- 一 本書を編むに當りて米田無諱居士は懇切なる助言を賜ひたり、茲に特記して之を謝す。
- 二 本書は去る明治三十五年六月二十六日夜、僅々二時間にして草したるもの也、故に議論文章共に甚だ稚氣を免れず、唯幾分の修正を加へたりと雖も、而も余は、余が當時の感慨を記憶せんが爲めに、其大体を保存せり、今之を出版するが如きは、識者の笑を買はんを深く耻づと雖も、又幾分の時弊に適中するあらんを認めたるが爲めに、敢て此舉に出でたり。
- 三 本書は目下教界時事紙上掲載中なる僧侶改革論を基礎として立論したるものなるが、今之を出版するは同社の好意に背く所以なれども、他の勢ひ止むを得ざるものありし爲め、之が出版

を急ぎたり。

例二

四 本書に廣告を掲載せしは、余が自費出版の負擔をして、幾分
輕減せんが爲めなり、利慾主義に出でたるに非ず。

本書目次

緒論

第一章 其非難

壹 佛敎の根本義たる衆生濟度の本旨に違ひ平等無

差別の佛勅に契はざること

貳 自利利他の本旨に背けること

參 消費するのみにて生産するを知らざること

四 道德上經濟上の害毒たる奢侈の風あること

第二章 救濟方法

壹 爵位階級を廢止即ち返上すると

貳 家憲を制定し其規律を嚴正ならしむること

- 三 依頼心を除去すること
- 四 新知識を注入すること
- 五 嚴峻なる刑罰法を制定すること

附 録 宗弊改革私見

宗教家大革命論目次終

宗教家大革命論

堂屋敷平民著

緒 論

社會の腐敗は、今日に始まりたるにはあらざれども、今日の如く甚たむきは、未だ曾て之あらざる也、看よ政治界に政治家の腐敗あり、新聞社會に新聞記者の腐敗あり、最も風教を重んずる教育界にすら、腐敗の聲を聞き、最も規則の嚴正ならざる可らざる法曹界にすら、腐敗の噂絶ゆるを。

宗教家の社
會正義に於
ける恰も水
源地の如し

宗教家は羅
針盤なり、
櫓なり、錨
なり、舟子
なり、凡夫
は船の如き
のみ

然り彼等は腐敗せり、吾人は之を黙過せよと云ふにあらざれども、彼等の腐敗や、其流毒の緩漫なる尙恕す可きものあり、宗教家の腐敗に至りては決して然らず、何となれば彼等は、社會正義の原動力たる可きものなれば也、社會道德の源泉たる可きものなれば也、之を例ふれば、宗教家は、恰も水源地の如く、政治家法曹家は、其枝管の如く、故を以て政治家の腐敗あるも、教育家は健全なるに差支なく、法曹家の腐敗あるも、新聞記者は公正を失ふに及ばず、然るに若し人ありて、其水源地に毒泉を注入せば如何、各管如何に力めて淨水を得んとするも能はざる也、吾人は實に之を思ふが爲めに、深く宗教家の腐敗を憂ふ、更に之を例ふれば、宗教家は羅針盤の如く、櫓の如く、錨の如く、將た舟子の如く、一般社會は、唯僅かに船の如きのみ、今夫れ風なきにすら浪高き茫洋に浮べるの船、一の羅針盤なく、櫓なく、錨なく、將た舟子なくして、風荒むが如き事あらば、例令堅艦鐵船と雖も、豈に如何してか破壊せざるを得んや、吾人が宗教家の腐敗を以て、深く憂ふ可しとなす所以、茲に於てか愈々痛切なるを覺ゆ。

單に宗教家と云へば、耶蘇教家もあれば、佛教

家もあり、佛教にも亦種々の宗派ありと雖も、吾人は寧ろ日本宗教の最大部分を占むる佛教、殊に佛教中の眞宗僧侶に就て論述せんと欲す、故に吾人が僧侶と云へる多くは、佛教家全体を指し、又宗教家全体を包含す、即ち要は大を取りて、小を兼ねいめんとにあり、然らば則ち眞宗僧侶の腐敗せる状態如何、乞ふ之を以下に分説し、進んで其救済法を論述せむ。

第壹章 其非難

吾人は今、彼等に對して詳細なる非難を試むる

の邊を有せず、唯茲に其重なる二三を擧ぐるに止めむ。

壹 佛教の根本義たる衆生濟度の本旨に違ひ、平等無差別の佛勅に契はざること。

回顧すれば往昔三千年、中天竺に於て權勢堂々たる迦毘羅波斯城、首頭馱那王宮に生れ、瑠璃殿に住し、玻瓈床に座し、且には清麗なる佳木珍草を眺め、夕には窈窕たる三千の美姬を擁し、四時の歡樂、山海の珍味、一として意に任せざるなき榮耀榮華の身に於て、偶々殿外に散歩し、生老病死の幻境を視、忽然として人生の果敢なきを嘆し、

佛陀の衆生
濟度は如何
何

空河の星清き一夜、愛馬に騎し、一人の侍者と共に雪山の麓に到りて、世を捨て悟道を得んが爲め、修業の途に就きし悉達瞿曇はそも如何、慈眼衆生を憫愍し、悲腸黎庶を矜哀し、恵むに眞實の利を以てし、而して自ら衆生濟度と云へるに非ずや、是實に佛陀出世の本懐にして、亦佛教の根本義なりし也。

吾人は現今の如き澆季末法の僧侶に向ひて、瞿曇太子の如く然れと責むるものに非ず、雪山に登らざれば、僧侶たるの資格なしと云ふにも非ず、努めて佛教の本旨たる衆生濟度の教誨に従へよと。

先づ其眷屬
を救はざる
可らず

云ふにあり、止むなくむは、切めて其心を有せよと云ふにあり、是れ其職として當然の事なる可ければ也、然るに甚たしい哉、其實一家の眷屬をすら濟度する能はず、看よ彼等の前には、無情を訴ふる、妻子の泣鳴を聞き、彼等の後には、虐待に惱める、婢僕の不平等の洩るゝに非ずや、殊に彼の本願寺の如きに至りては、貧富に依りてすら布教濟度を異にせんとす、嗚呼是れ抑も何の故ぞ。

五十錢の銀貨を拂はざれば、何が爲めに御剃髪を受くる能はざる乎、參圓の紙幣を納めざれば、何が爲めに永代經の讀誦に預る能はざる乎。

貧者の一燈
富者の萬燈

吾人は茲に、御剃髪や經典讀誦の要不要を論究するに非ず、唯五拾錢參圓と價格を定め、以て貧者を佛縁に遠ざけつゝあるを嘆ずるが故に、とか云ふのみ、若し夫れ單に、一厘にても半錢にても、其喜捨の真心何れが大なりやと問はゞ、誰か亦答ふるに、五十錢三圓を以て、半はは名譽的に御剃髪讀經を購買しつゝある富者を以てせむ、諺に曰はずや、貧者の一燈は、富者の萬燈に勝ると、且つや彼等富者の御剃髪讀經代は、是れ何に依りて得たる、貧者の膏血を絞りたる結果に非むは、不正不當の高利に依りて得たる汚物贓財、其大部を占

奇怪の現象

むるに非ずや、而して彼等貧者が、一厘なり、五厘なり惜氣なく喜捨する賽錢の如きは、彼等が額の汗、軀の膏に依りて得たるものなれば、最も真正の淨財たる也。然るに其盜品的汚財を納むれば、御剃髪讀經の特待に預り、真正なる労働に依りて得たる淨財を喜捨するも何の特典ならん、天下豈に之より奇怪の現象なからざらん。

若し夫れ平等無差別の如きは、必ずしも佛陀の特製品に非ず、彼のキリストの如きも、天は雨を愚者にも賢者にも降らすと云へり、實に彼等の萬

法華なる基
督すらし人
若し爾の右
の順を打た
ば之と共に
左の順を向
けよと云へ
り

物に接するや、一といひて愛憐の因ならざるはなく、
一といひて憫愍の縁ならざるはなかりき、何ぞ貴賤
上下を擇ばんや、看よ彼の九層樓上、人位を極む
可き悉達瞿曇は、時に茅屋の乞丐と枕を列べ、時
に野獸を友として石上樹下に安臥せり、彼に危害
を加ふんとしたる提婆達多をすら、平等に取扱ひ
たるに非ずや、捨てし世を啣ちし西行法師すら、
山に入りては「思ふところもいらすゆさくれ
ぬ、花の宿かせ野邊の鶯」と咏トて、平等的觀念
を發揮したりき、進んで眞宗の祖師、親鸞聖人に
至りては、大織官たる藤原の裔に生れたりと雖も、

自ら愚禿と稱じ、山間僻地の苔臭き老嫗老翁を指
しては、我御同行御同胞と云へるに非ずや、眞に
彼等は、一切衆生を濟度せんには、平等の原則に
依るの外、なほといはる也。

然るに翻りて彼の本願寺の如きに見よ、遠く佛
弟子と稱へ、近く親鸞の法燈を傳へたりと云へど
も、其信徒と法主との間に、強ひて不平等の限界
を畫し、末派寺院にすら等級を設けて、以て人爲
的差別を作り、己れ僧侶の分際を以て人爵を希ひ、
榮祿に汲々たり、茲に於てか作爲したる限界は、
愈々傳道布教を不自由ならしめ、益々凡夫同胞を

●悲●み●て●歡●喜●す●
●し●め●て●歡●喜●す●
●歡●喜●す●
●悲●み●て●歡●喜●す●

疎隔するの籬壁たり、況んや鳥類をや、獸類をや、
嗚呼吾人は、實に今日佛陀の存在せざるを悲みて、
歡喜し、親鸞の存在せざるを悼みて幸福とす、吾
人は我宗教界に於て、我佛教界に於て、斯の如き
沒法悖度漢の存在を慚愧すれば也、而して佛陀や
親鸞の嚇怒に堪へ能はざれば也。

戒 自利利他の本旨に背けること

佛教中聲緣二乘は、自利利他を兼ねず、實に自
利利他は、是れ圓滿具足の大乗妙法たる也、善導
の喝に曰はく、自信教人信、難中轉更難、大悲傳
普化、眞成報佛恩、是れ善導の言を假りたる佛陀

の大本懐たらざるなからむや。

瞿曇太子何が爲めに王宮を出で、雪山に登りし
ず、自ら開悟せんが爲め也、自ら開悟するに非む
は、衆生を教誨する事能はざれば也、彼の九歳を
以て俗世の一期とし、叡岳に登りし範宴の如きは、
最も能く之を實行指示せしものに非ずや。

自信なくして利他を欲するは、持たざる袖を振
るに等し、人誰か之を信せむ、信ぜざるに強ひて
信せしめんとするの結果は、偽善を生じ、虚飾を
増さしむ、之に反して金剛不動の自信たにあらば、
之を教へざるも、人自ら感化し、信仰す、況んや

自信を以て、他人を教導するに於ておや、彼の佛陀が菩提樹の下、廓然として大悟を得るや、募らずして三千の弟子集り、命ぜずして八萬の聽衆來れるもの、豈に亦謂れなれどせむや。

吾人は端なく之を現今の僧侶に對照するの止むなきに至り、轉た痛嘆慨息に堪へざるものなくむは非ず、嗚呼綺羅たる金襴の袈裟は、以て衆目を眩惑せしめ得むも、何ぞ能く真如の月光を以て、凡夫の盲冥を照す可き、嗚呼懸河の辯は、以て富留那を避易せしめ得むも、何ぞ能く八功德水を以て、憊毒の火焰を鎮む可き。

● 消費するのみにて生産するを知らざるを

● 單に生産と云へば、頗る茫漠たるを免れざるも、吾人が茲に云へるは、狹義に解したるものにして、即ち主に物質的生産を云ふ也。

然り而して生産するの目的や多端なりと雖も、期する所の消費に非るは殆んど之なり、寧ろ多くの物は、消費せんが爲めに生産する也、従つて世の何をか消費するものは、又必ず何をか生産せざる可らざるの義務を有す、是に於てか延暦寺の開祖傳教大師は、學術練磨の傍ら、田畑を拓き、溝渠を鑿ち、殖産興業を計り、以て後世の利福に資

せり、道昭の如きも亦、諸國を歴遊しては、路傍に井を鑿ち、渡津に船を設け、以て公衆の便益を計りたり、若し夫れ進んで金剛峰寺の開祖、弘法大師に至りては、諸國を遍歴し、到る所荆棘を拓き、水利を謀り、道路を便にし、橋梁を修築して、以て民人の利福を増進したるに非ずや、嗚呼彼の綜藝種智院を建て、公衆に供し、施薬院を興して幾多の病民を救護し、更に工業を盛大にし、彫刻術の發達を計りたるは誰ぞ、亦是いろは假名の作者弘法大師其人にあらずや。

豈に啻に傳教弘法のみならんや、かの榮西禪師

の茶種を支那より持來りて梅尾へ植付け、遂に日本國中の利益を計りたるが如き、文覺上人、行基菩薩、又は空也上人等が、橋梁を修築し、水利を便にせしが如き、數へ來れば其幾何なるや知る可らず、然りと雖も、其生産が物質的にして、國利民福を増進せしむるならば、豈に稱するに足らむや、若し之を求めなば、上は崇神仁徳の両帝を始め、下は足利豊臣より徳川に至るまで、皆然らざるはなし、唯夫れ彼等僧侶に取る可きは、消費のみにして生産の大なるを、國利民福を謀ると共に、精神的大産物を供給せしむるあり、實に彼等は、荒

れたる徳の野を拓き、廢れたる仁の道を通せり、
 即ち精神的生産をなさんか爲めに、物質的生產を
 なし、從つて兩々相俟ち、一を生産せんとして二
 效果を得、二生産を欲すれば、四效果自然に從ふ
 に至り、此徳以て天下を風靡せしことは、取りも
 直さず彼等が佛教弘通の好方便なりと也、而して
 是れ最も有效なる方便なりき、管仲曰はく、倉廩
 充ちて榮辱を知り、衣食足りて禮節を知ると、宗
 教家以て他山の石となすに足らずや。

吾人は最早や現今の僧侶が、微塵半芥の生産を
 なさざるを咎めざる可し、而して漠大なる消費も、

亦之を拒まざる可し、唯深く恐るゝは、彼等の遊
 惰が延びて遊民を製造し、間接に社會の生産を減
 少せざらむこと之のみ、而も之すら無益に歸しつ
 とあり、豈に嘆す可きに非ずや。

四 道徳上經濟上の害毒たる奢侈の風あると

奢侈の道徳上、經濟上に及ぼす禍害の大なるこ
 とは、今更喋々する迄もなし、看よ奢侈が驕慢心
 を増長するの多き、且つ奢侈品製造に徒費する勞
 力の夥多なる果して幾何ぞ、而して驕慢心は道徳
 に背き、勞力の徒費は經濟上の禍害に非ずや、爲
 めに民力衰へ、國家倒れ、社會大腐敗を來せるの

羅馬大帝國
の末期を見
よ

路易十四世
の末期は如
何

藤原徳川氏
の末期は如
何

例一二にして足らざる也、嗚呼夫の世界に光輝燦然として、天國かと疑はれたる羅馬大帝國も、奢侈の風に浸染せざらむには、何ぞ慘憺たる末期を見る可き、嗚呼夫の路易十四世をして、奢侈に耽酔する彼が如く深からざらめば、何ぞ大革命の惨況を現出す可きぞ、我藤原氏の如きも、其車馬衣冠邸宅の美、皇室と優劣を競ふに至りて外に對する勢力順に挫け、三百年來の大平に養ひたる奢侈は、遂に民心を萎靡せしめ、延ひて徳川幕府の末期を壊敗せしめぬ、バイロン曰はく、一度奢侈に耽れば、永久に人を汚すと、嘗に人を汚すのみならず、國家を汚し、社會を汚さずむは止まざる也、嗚呼苟くも衷心社會を思ひ、民人を懷ふもの誰か之を悪まざらむや、宗教家の如きに至りては、亦素より問ふを須ひざる也。

茲を以て佛陀先づ實例を示し、雪山に登るや、絹衣錦冠悉く之を放棄し、麻衣蔽布唯一貫のみ、希臘の聖賢ソクラテースは、春夏秋冬、唯破衣一枚を纏ひ、ダイオゼテースは、衣服は勿論、食物の如何をすら問はざりき、近くは眞宗の祖師親鸞の如き、一竿の竹杖、一衣の黒布、以て其終生を過せり、下りて蓮如上人、証如上人の如きに至りて

羅、ソク
ラテース、
ダイオゼテ
ースに見よ

親鸞上人に
見よ

二十

は、如何に質素なりしか、之を蓮如上人の御一代
聞書に見るを得可けむ。

一 前々住上人は、昔はこふくめをめされ候、白
小袖とて、御心やすく召し候御事も御座なく候
由に候、いよく御かなしかりける事とも、折
々御物語候、今々の者は、左様の事は承り候て、
冥加を存すべきの由、くれと仰せられ候。

一 よろづ御迷惑にて、油をめされ候はんにも、
御用脚なく候間、やうく京の黒木をすことづ
ゝ御とり候て、聖教なご御覧候由に候、又少々
は、月の光にても聖教をあそばされ候、御足を

も大概水にて御洗候、又二三日も御膳まいり候
はぬ事も候由、承りおよび候。

一 人をも甲斐々々しくめしつかわれ候はである
上は、幼童の襤褸をも、御ひとり御洗候なご、
被仰候。

一 存如上人召仕われ候、小者を御雇ひ候て、め
しつかわれ候由に候、存如上人は、人を五人め
しつかわれ候、蓮如上人御隠居の時も、五人め
しつかわれ候、當時は御用とて心のまゝなるこ
と、をらおそらく、身もいたくかなしく存す
べき事にて候。

一 前々住上人仰せられ候、昔は佛前に伺候の人は、本は紙絹に幅をさし着候、今は白小袖にて、結句着替を所持候、これその比は、禁裏には御迷惑にて、質をおかれて御用にさせられ候と、ひきことに御沙汰候。

一 又仰せられ候、御貧しく候て、京にて古き綿を御とり候て、御一人ひろけ候事あり、又御衣は、肩の破れたるをめされ候、白き小袖は、美濃絹のわろきを求め、やうく一つ召され候由仰せられ候、當時はかやうの事をも知り候は、ある可きやうに、皆々存卜候は、いに、冥加につき

申べし、一大事なり。

証如上人に見よ

蓮如上人は、半ばは貧なるが爲めに、止むなく質素なる生活をなせしこともありつべし、然れども是れ彼に取りては、決して貧ならざれば、驕奢を極むるものと断定するの理由とならざる也、殊に証如上人の如きに至りては、身自ら豊かなる隠居の生活をなすに至り、前々住蓮如上人が幼童の襁褓を手づから洗ひたるを偲び出で、五人の召使を雇ひたるを、「そらおそろしく身もいたくかなしく存す」と云ひ、僅かに着替を得ては、蓮如上人が肩の破れたる衣一枚を纏はれたりし時を懐ひ

出で、「當時はかやうの事をも知り候はせある可
きやうに、みなく、存候はせに、冥加につき申
べし、一大事なり」と絶叫せりき、昔は貧者の交友
を忽にせず、糟糠の妻は堂を下さすと云ひき、實
に富貴を得て、貧時を省みるは、是れ豈に質素の大
なるものに非ずや。

然るに蓮如上人逝いて爰に四百年、現今の本願
寺僧侶を見るに如何、殿堂の華美壯大は問はず、
其權勢堂々、輕車駟馬を駟りて以て王侯貴族を擬
し、着るに錦繡を以てし、纏ふに綾羅を以てす、
出でしは祇園の花に狂ひ、入りては酒池肉林の贅

に。娶く、誰か亦黒衣の親鸞に學び、麥飯の蓮如に
做ふものぞ。

或は辯護するものあり、曰はく今や彼れ伯爵た
り、従つて彼の駟車や錦服、以て不相當に非ず、
寧ろ必要品たりと、吾人は之に答へて、飽まで非
なりと云はむと欲す、夫れ奢侈は贅にして且高價
なるを云ふ、而して彼の駟車の如き、若し田畑に、
又は工事に赴かむが爲めならば、全く必要なしと
は斷ト難けむも、彼の駟くるや花見遊山のみ、淫
樂の巷のみ、生産の爲めならで、消費の爲め也、
自用と云はむより、は、他人の邪魔也、強ひて出で

八萬四千の
經典未だ美
衣美服を説
かず
親鸞の黒衣
蓮如の破衣
は以て布教
の價値を損
ずるに足り
ざりき

んど欲せば、足あり、下駄あり、必ずしも駟車を
俟たんや、況んや工事作場に行くすら、凡ての人
は車を用ひざるに於ておや、殊に金色燦爛たる袈
裟衣冠の如き、八萬四千の經典を繰返さんも、未
だ其必要を説かざる也、看よ、親鸞は、終生黒
衣に安んせしも、彼の布教に些少の差支なかりき、
蓮如は肩の破れたる衣一枚をすら持ち兼ねたるも、
彼の教訓は、爲めに毫も其價を損せざりしにあら
ずや。

且亦云ふものあらむ、奢侈は關係的のものなり、
蓮如の貧僧が、衣一枚を有せざりしとて、以て現

蓮如上人は
好んで富ま
ざりし也

今の僧侶を推す可らず、彼等は財貨に於て、蓮如
に幾百倍す、寧ろ以て錦服金冠の及ばざるを憂ひ
とせざらんやと、吾人は答へん、奢侈の關係的な
るは、富の程度の關係的なるが故に非ずや、而し
て彼等の富と、蓮如の富とは、孰れを以て大なり
とする、換言すれば、一厘半毛の借財かき蓮如上
人の貧と、幾百萬圓の負債ある彼等の富とは、孰
れが富の程度を高くとするか、蓮如上人と雖も、
貧民の膏血を絞り、信徒の財物を吸集せんには、
肩の破れたる衣を着するに及ばざりしも、上人は
自ら門徒より物を多く参らするを以て、能き弟子

と思ふはひが事なり、門徒も亦、坊主に物をたに多く参らすれば、我が力叶はずとも、坊主の力にて極樂に参る可きもの考ふるは、大なる謬りなりと云ひて、受くるなからんをかめ、納むるなからんを勧め、而して自ら貧を以て甘んせし也、能はざるに非ず、強ひてなさざりし也。

或は亦曰はん、文明の進歩と共に、奢侈の程度も推移す、故に昔日の奢侈、必ずしも今日の奢侈に非ず、今日の奢侈、亦必ずしも將來の奢侈に非るなりと、然り或程度迄は、文明の進歩に伴ふて、奢侈の程度も昇進す可し、然りと雖も其文明の進

文明の進歩
とは夫れ何

を標準とす
べきか

歩とは、夫れ何を標準とす可きか、勿論東海道を半日に奔する瀛車は、以て五十三宿の御駕籠に比す可らず、萬里を瞬間に通ずる電信は、以て飛脚の及ぶ所に非ずと雖も、翻つて他の半面を見るに、昔は金借りて返さぬ時は、人中で笑へとの証文にて事済みしに、今は數人の保証人を要し、登記を要し、登記に監督を付し、尙且確實なる能はざる状態に立至りたるに非ずや、即ち物質的に百歩を進みて、精神的に千歩を退けるもの、如何してか之を以て、文明の進歩と云ふを得可けむ、寧ろ吾人は現今の社會を評して、猿猴に直垂とて云ふ

可きか。

奢侈の盛んなる事、獨り本願寺のみに非ず、各宗各派末派末流の僧侶に於ても亦然る也、或は寺階に依りて衣冠を競ひ、或は門末の寄附を強請いて、驕奢の爲めにす、實に今や滔々たる幾萬の僧侶は、學力の競争をなさずして、衣冠の華美を競ひつゝある也、品性の修養を論議せずして、外觀の如何を討究しつゝある也、淺間と云ふも愚かならずや。

競争は競争
なり然も其
目的は相異
なり

以上は吾人が、僅かに其非難の一部を舉示せる

に過ぎず、而も既に其社會に及ぼす害毒の如何に大なるかは、素より云ふを俟たざる所、茲に於てか吾人は、彼等に一大打撃を加ふるを敢てせる也、然れども是れ、決して吾人が宗教家を嫌忌するが爲めに非ず、況んや宗教をや、寧ろ深く宗教を信し、深く宗教家を愛するが故に、之を説くの止むを得ざりし也、「憎うては打たぬものなり笹の雪」、親の最愛なる子に鞭撻を加ふるは、實に其子の幸福を祈るが爲めに非ずや、徒らに打撃を加ふるは、吾人の本望に非ず、於此乎吾人は、進んぞ之が救済方法を説述せんと欲す。

第二章 救濟方法

三十四

救濟方法とは、即ち如何に革命を施す可きかと云ふこと是なり、今吾人は、項を分ちて其大要を論述せんと欲す。

臺 爵位階級を廢止即ち返上すること。

往昔釋尊、衆生を濟度せんとするや、先づ其王位を捐て、托鉢乞食の位置に就きぬ、親鸞の教化を布かんとするや、先づ大織官を去りて、愚禿の旅僧となりぬ、日蓮の如き、道元の如き亦然り、蓋し宗教の目的は、なる丈け多くの衆生を濟度せ

んといふれば、なる丈け多くの衆生に接近せざる可からざれば也。

人或は曰はく、爵位を有したりとて、衆人に接近する可らざるに非れば、何を以てか衆生濟度に差支あらんと、然り理論は妙なりと雖も、人爲的爵位を慕ふが如き俗物、豈に如何してか衆人に接近するを希はんや、殊に今日に於ける爵位の威光は、衆人をして恐れ近づく能はさらしむる一大障壁たるに於ておや、勿論亦吾人は、爵位を廢棄したりとて、彼等が直ちに眞正の善知識たりと信するに非れども、此を失へば彼を求めんとするは人

人爵を失は
しむるは天
爵を求むる
の一步

生の通理、彼等をして人爵を失はしむるは、既に天爵を求むるの一步を啓くものに非ずや。彼等の爵位を廢棄すると共に、門末寺院の等級階段をも廢止せざる可らず、夫れ佛教の本旨は、普く衆生を平等に濟度せんとにあれば、其障壁たる階級は、實に謂れなきことなれば也。

既に爵位階級を廢棄するに至れば、茲に彼等は、彼等が未だ曾て經驗せざりし、最も快活なる、最も健全なる平民的生活に移る可し、精神的に平民的生活に移ると共に、亦物質的に平民的生活に移らざるを得ざるに至らん、平民的生活とは、一

平民的生活
清とは何ぞ

平民的生活
の利益

平民的生活
の利益は、
自利他圖
満足せり

言にいて云へば、質朴簡易なる生活なり、夫れ質朴簡易なる生活なるが故に、彼等は最早や、多額の費用を徒費じて、窮窶なる駟車に鞭つの必要なき也、而して足に任せて行く所、心に任せて趣く所、云ふ可らざる快活を覺ゆ、測る可らざる健全の伴ふを發見せん、然れども其最も重なる利益は、實に彼等が布教の機會を見出すことの多きにあり、嗚呼足に任せて行く所、路傍に倒れたる跛者を得れば、是れ汝が佛縁を授くるの好時機に非ずや、心に任せて趣く所、飢餓に叫ばん貧者を見れば、是れ豈に汝が心の糧食を與ふ可きの好時機に非ず

や、萎める花の姿に接しては、無常の觀念愈々深く、鳴く山鳥の聲聞いては、哀憐の情湧然として禁下難く、滾々たる溪水を喫む時、心の空も澄み渡り、怒れる山に觸れん時、汝が信念益々堅固を加へずや。

以上は唯平民的生活に伴へる副産物のみ、若し夫れ爲めに得る實物教育の如何に大なるものあるかは、豫め算す可らず、蓋し其郷に入らずむば、測知す可らざれば也、吾人が彼等に平民的生活を推薦するも、亦所以なきにあらざる也。
家憲を制定し其規律を厳正ならむと

一國の憲法は、一國の基礎也、一家の憲法は、一家の柱石也、國家は憲法に依りて愈々鞏固に、一家は家憲に依りて益々健全也、例へば彼のロスチャイルド家の如き、我三井家の如き、長幼順に違はず、賞罰當を失はず、事務は敏活に行はれ、家運日に月に隆盛に趣くは、一に家憲の然らむる所たるを知る。

然れども本願寺に於ける家憲の如き、未だロスチャイルド家三井家と範を同ふせざるものあり、即ち彼にありては、係りて財産を重むとすれども、此にありては、最も重きを家族制度の上に置かさ

る。可。ら。ず。不。當。の。驕。奢。を。禁。ず。る。が。如。き。是。也。蓄。妾
の。禁。止。の。如。き。是。也。

四十

論少しく餘岐に涉るが如きも、乞ふ吾人をして蓄妾の如何を一言せしめよ、惟ふに古來我社會に此弊風あり、而して敢て深く之を咎むるものなきのみならず、寧ろ必要物視せられたるは、全く偏狹なる血統主義の餘弊に基くものたり、既に餘弊たり、故に斷つて人倫正義に背戾するものたる也、然も往事追及し難し、吾人は今後の社會より斯かる不倫不義の惡風を驅逐せんことを努む可き也、殊に宗教家の如きに至りては、之が掃蕩の先驅と

各宗管長等
備の蓄妾に
此弊風を
打破せざる
可らず

なり、以て人倫の大義を發揮せざる可らざるに、今や却つて各宗管長豪僧等は、競ふて自ら蓄妾し、恬として耻づるものなり、況んや彼等の蓄妾の如き、其目的とする所、全く獸慾を逞ふせんが爲めなるをや、吾人が之を家憲に特筆せよと云へるは、所以なきに非る也。

勿論吾人は、家憲崇拜者に非ず、出來得可くは、家憲なくして、家憲あるより大なる美果を結ばんことを欲すと雖も、是れ今日の社會に於て甚た望む可らざる所なるが爲めに、家憲制定の止むなしくとなすのみ、而して吾人は、窃かに彼等が今

日、家憲の繩に束縛せられざれば、以て一身をす
ら處理する能はざるに至りしかを思ひ、寧ろ娯魔
の入獄の感なくむはあらず。

尙一の注意す可きは、如何にして之を實行せし
む可きかにあり、蓋し現今社會の通弊は、律法の
調はざるに非ずして、行はるゝの少きにあれば也、
吾人茲に於てか建言せんと欲す、即ち若し彼等に
して、之に違反したりと認むる時は、當さに彼等
の末期として、幾百千萬の信徒は、彼等の放逐を
勵行して可なりと、蓋し信徒なるものは、年代の
久しき、徒らに血統的信仰を捧げて、神聖不可犯

ものゝ如く考ふると雖も、遠く按ずるに教祖親鸞
の心中は、全く法燈の永續にありて、單に血統の
繼續に非ざりしは、彼の實子善鸞が、宗意違反な
りとの故を以て、其自ら死に垂んとするも、尙我
子に非ずとて、近づけざりしを以て明かなり、果
して然らば、其家憲の違反者を放逐せんも、他に
法燈を繼承せんものゝ絶滅せざる限り、僅少の憚
りなき也、寧ろ教祖の本懐とし玉ふ所ならざらん
や。

吾人が以上に論せし二項の如き、事本願寺のみ
に關せるに似たれども、然も彼等は一宗の長老と

上の向ふ所
下之より甚
だしきはな
し

四十四
いて、其一舉一動は、以て萬僧の學はんとする所、
否學はざる可らざる所、若し其一步を過たば、既
に萬僧を陥るに等しとす、吾人が重きを茲に致す、
豈に管に彼等のみの故ならんや。

參 依・頼・心・を・除・去・す・る・こ・と。

人間最大の耻辱は、自己の手腕を以て、自己の
口を糊する能はざるにあり、殊に大丈夫にして然
るにあり、彼の詩人ホーマが、勞力は人生の運命
なりと云ひしも、亦其半面の眞理を道破したるも
のに非ずや。

斯く云はゞ人或は難トて曰はん、僧侶は布教濟

小人閑居し
て不善をな
す

度を本務とすれば、焉んぞ能く其他の業務に従事
するの餘暇あらんやと、誠に彼の親鸞聖人が、越
後の流罪當時に於ては、幾百千の道俗、晝夜を間
はず押し寄せ來り、寸時の餘暇とてなかりしも
今日は決して然らず、寧ろ萬を數ふるの僧侶は、
年一回の盆會と、二回の彼岸會と、僅少の葬式を
爲すの外、何の爲す所なしと雖も、彼等は別に研
學の目的を有する事なく、唯終日終夜、其無事に
苦しみつゝ、甚たむきに至りては、従つて罪惡に
交り、賭事を試むるすらあり、よし斯く迄甚たし
からざるも、所謂蓮如上人の言の如く、枕を友と

して朝夕眠りに耽りつゝあるに非ずや、況んや吾人は、強ひて勞務の爲めに布教を等閑にせよと云ふに非ずして、等閑にいついある餘暇を以て、勞務に従事せよと云ふにあるをや。

勿論吾人は、彼等に向つて無意義に勞務を強ひず、唯如來を以て商賣道具の如く考へ、自ら常に遊惰に耽り、剩さへ驕奢を極めつゝ、其經費の不足は、一も二も皆之れ信徒に仰がんとする卑賤陋劣なる依頼心の除去を欲するが故に、然か云ふのみ、然らば則ち茲に起る可き問題は、彼等が如何なる勞務に従事し、而して亦如何にして口を糊す

可きかにあり。

孟子曰はく、不素餐也と、吾人は彼等に向つて鋤鋤を執れよと云はず、作事工場に赴けよと強ひず、只不素餐也の意思を以て、彼等が布教の餘暇を應用し、養蠶なり、教員の補助なり、殊に一般人民の生産力を増加せんが爲めに、彼等に代りて公共的事務の衝に當るにあり、例へば學校建築の寄附金募集の如き、間接の生産として、有力なるものなれば也。

然れども斯の如きは。未だ以て彼等が自給の方法として充分なりと云ふ能はざるも、其餘暇を應

用すること斯の如くして、他方には無報酬に佛陀の福音を授けなば、其信徒の感化の偉大なるは云ふにも及ばず、彼等は擧つて淨財を捧ぐ可く、強ひずして寺院の興隆を希はん也、嗚呼彼等の糊口も亦易からずや。

吾人常に思ふに、僧侶程依他心の深きはなく、殊に真宗の如き血統的寺院に生れたるものに至りては、遺傳性の然らむる所か、門末信徒の財物を受くるを何の感ともなく、即ち彼等の寄附せる米一升と雖も、並大抵の辛苦に依りて出来たるに非れば、之を苟にす可らずと云ふの觀念、微塵も

有之ことなむ、唯讀經にも、説教にも、寸時として念頭を距らざるは、恐らく御布施の多寡位ならんのみ、淺間と云ふの限り也。

倩ら按ずるに、幾千萬を以て數ふる信徒中には、寺院の寄附を以て、人生の義務の如く考へ、従つて多く之を捧げ得しものは、名譽の如く信じ、甚たしきに至りては、蓮如上人の言の如く、坊主に物をたに多く参らすれば、自が力叶はずとも、坊主の力にて極樂に参る可きものと思へるもの、滔々皆然るが如し、然も其愚や尙は恕す可し、唯夫れ吾人の憂ふるは、實に是れ彼等が他力の信心を

信心獲得せ
られざる所
以に非るか

條件的の妄
想を以て、
無條件的の
大徳を了得
する能はず

僧侶墮落の
機を減少
せしむるは
信徒をして
寄附の實價
を知らしむ
るに若くな
し

獲得する能はざる所以ならざるかにあり、思へ例
ひ彼等は、其寄附の爲めに、坊主の方に依りて極
樂に參る可きものと思はざる迄も、既に寄附した
りと云ふの一念は、決して彼等の腦裡を艾除する
能はざる也、即ち彼等が他方の信心を獲得せんと
するや、將さに條件的の妄想の先んずるあり、以
て一度寄附せんものは、最早無條件にして、宏大
無邊なる如來の恩徳の有難さを了得する能はざる
に至る也。

以上は少く極端の論たるを免れざらんも、冀
くは僧侶をして、如何に窮苦に迫るとも、興へざ

るを進んで受くるなからんと、一事勵行せらるゝ
に至らば、近くは彼等が墮落の機會を減少するを
得ん、而して之が實行は、一に門徒をして、寄附
の功德微少なるのみならず、寧ろ時として、罪
惡なる所以を覺らしむるに若くなむ。

或は吾人が此論を以て、慈善の美風を撲滅する
ものなりとなさんも、而も吾人は、彼の世に宗教
事業、公共事業等に盡瘁すると云ふ事は、坊主に
寄附すると云ふ事と、全く別物なるを信ずるもの
也、即ち遊惰なる僧侶の爲めならで、或は興學の
爲め、或は布教費の爲めに喜捨せんとするが如き

は、獎勵の上にも深く獎勵せざる可らざるとたる也、唯何れの場合に於ても、其喜捨金の左右が、喜捨者の自由を脱する時は、既に喜捨の效力を失ひたるものと云ふ可し。

四 新知識を注入すると。

今や日進月歩の勢力を以て、百般の學術技藝は、發達進歩しつつあり、此の時に當りて、吾人が精神の慰安者、心靈の教導者たる宗教家は、抑も亦如何の處置をか採らんとする。

素より吾人は、彼等を誣ひすと雖も、而も尙時としては、川越名號の來歴を聞き、塩漬梅の因縁

現今僧侶の無識なる状態

を聞くことなれどせず、寧ろ多くの場合に於て、極めて非科學的なる、極めて非論理的なる、殆んど常識ある總てが、憤飯に堪はざる説教を、而も堂々たる教導職より、聽聞しつつある也、近くは日露戰役從軍布教師の如き、其選拔せられたるに係らず、無學無能にして、時人の笑柄となれるにても徴す可し、是れ實に今日の有識者をして、宗教より縁遠くならしむる原因ならざるかを思ふ毎に、未だ曾て憤慨の念禁する能はざるを覺はすむはあらず。

勿論宗教は、感情的のものにして、理窟的のもの

のに非れば、其教導者に於ても、必ずしも博大なる學識を有するに及ばざらんも、實際に於て聽者をして、高尚なる理性の方面に導き、且つ天賦の感情と融和しつつ、安心立命の域に到達せしめんことは、今日の最良なる宗教弘通の方法たらざるなからんや。

従つて起る可きは、僧侶の資格問題はなり、吾人は即ち日はんと欲す、願くは彼等をして、普通學に通ぜしめよ、而して其程度は、少くとも高等學校卒業以上たらしめよと、或は爲めに其資格を得るもの甚だ少きに失するの感なきに非ずと、雖も、

僧侶の少きを

を述べず光輝の少きを恐る

其少きは愈々以て、其光輝を増大せしむる所以ならざらんや、看よ晨星は少しと雖も、却つて群星を凌ぐの光輝を天の一方に放つに非ずや、且つ又聞かずや、紙幣の濫發は、硬貨の騰貴を來し、硬貨の濫鑄は、物價騰貴の原因をなすと、吾人は實に今日の僧侶濫造に於て、其最も然るを見る。

然りと雖も亦、如何に資格の程度を高めんも、未だ以て新知識の具備せりと云ふ能はざるものあり、蓋し宗教の多く……殊に真宗の如きは、徒らに形式に拘泥して、紋切形の讀經や説教を獎勵すと、雖も、少く進んで學理上に新説を出す如き

新説は邪説にあらず

佛陀の唱道
せざるも衆
生濟度に益
ありとすれ
ば、大に之
を獎勵して
可なり

五十六
こ。と。あ。れ。ば。其。實。質。の。如。何。を。す。ら。攻。究。せ。ず。直。ち
に。以。て。異。端。邪。說。と。誣。ひ。之。を。破。門。せ。ん。と。す。彼。の。村
上。博。士。の。如。き。其。一。例。な。り。吾。人。は。村。上。說。の。當。否。を
言。は。ず。唯。其。處。置。の。偏。頗。妄。斷。な。る。を。憤。慨。す。る。の。み。
若。し。夫。れ。佛。陀。の。心。を。以。て。せ。ば。苟。く。も。衆。生。濟。度
に。益。あ。ら。ん。限。り。其。新。說。た。る。と。將。た。佛。陀。の。唱。導
せ。ざ。り。し。所。た。る。と。を。問。は。ず。益。々。大。に。獎。勵。せ。ざ。る
可。ら。ざ。る。に。其。却。つ。て。反。對。せ。る。もの。あ。る。は。實。に。是
亦。新。知。識。の。缺。乏。に。因。由。す。る。もの。と。云。は。さ。る。可。ら。ず。
五 嚴。峻。な。る。刑。罰。法。を。制。定。す。る。と。
嚴。峻。な。る。が。爲。め。に。必。ず。し。も。良。法。律。た。る。能。は。ず。

古代の僧侶
に對する刑
罰法

曾て推古天
皇の詔に、
夫れ道人も

唯夫彼等をして、殊更らに重き刑罰を加はしめんとするは、一に彼等が人道の保護者なるが爲めのみ、吾人凡夫の教導者たる榮譽の權利を有するが爲めのみ、遠く之を例すれば、彼の佛國中世紀に於ては、僧侶の犯罪者をして、直ちに流刑せしが如き、我朝推古帝三十二年に、一僧其父を毆ちしとの事叡聞に達したれば、大臣を召して諸寺の僧尼を聚め、之を推問し其事實を得ば重罪に處せんと宣ひしが如き是なり、又古法家に聞くに、密室監禁罪の濫觴は、實に六世紀の法律に於て、僧侶の犯罪者を處罰せんが爲めに設けたるに因すと云

尙ほ法を犯
さば、何を
以てか俗人
を誨へんと
あり

ふ、以て古來僧侶なるものは、犯罪上の責任重大なりしを知るに足る可し。

唯其刑罰法の制定は、如何なる方法を以てす可きか、問題なり、吾人は勿論政教一致を唱導するに非ずと雖も、既に宗教を以て、社會道德の源泉たり、少くとも社會の一大潛勢力たるを認めん以上は、之を國法の一部として制定するの不可ならざる可きを見る。

吾人は以上に於て、眞宗僧侶の現状と、併せて救済法の大要を説述せり、素より之を以て悉せり

宗教家革命
の實施と日
本社會

とせざるも、吾人が提出せる要件をして、實行するに大過なからしめば、眞宗僧侶……廣くは宗教家の革命、必ずしも絶望ならざらむ乎。

而して彼等の革命が實施せらるゝことあらむか、政治家、辯護士、乃至百般社會の腐敗は、自然に其後を絶つ可く、以て日本社會の健全期して俟つ可き也、而も之を爲さずして、徒ちに現状に維持せんとするか、吾人は村上博士に非るも、一日も速かに本願寺の滅亡を祈らざるを得ず、宗教家の滅亡を願はざるを得ず、蓋し是れ社會腐敗の源泉を断つ唯一方法なれば也。

宗教家大革命論終

附錄

宗弊改革私見

今茲に宗弊改革と云ふ、然れども各宗各派に涉りて、之を詳細にせんことは、門外漢たる吾人の到底能はざる所、唯吾人は、僅かに所見の二三を陳述するに止めんと欲す。

● 肉食妻帯を實行すること。吾人は茲に於て、夙く率先して肉食妻帯を實行せる真宗の祖師、親鸞上人の一大卓見に驚かざるを得ず、何とかなれば

六百年後の情勢は、遂に茲に至らぬ止まされは也、看よ明治四年には、女人結界の法も解かれ、肉食妻帯の禁も廢せられたり、勿論此等は世間の法規にして、彼の教義と何等の關する所なるとし、尙幾分世間に憚りて、公然肉食妻帯を實行する者少しと雖も、而も隱に妾を蓄へ、肉食をなさんば、其害毒一層甚たしきものなくむはあらず、寧ろ若かんや此際に於て、各宗各派とも肉食妻帯を實行し、仙人的陋習を打破して實際的の新风習を起てんには、蓋し宗教をして實際的效果を擧げんには、宗教家を以て實際世間的ならむる

に始まれは也。

各宗統一を謀ること。

佛耶二教統一の如き

は、云ふ可くして行はる可らず、又行ふ可きものに非すと雖も、等しく是れ佛陀の經典を所依とせ、各宗各派にありては、例令其依つて立つ所の異なるあるにせよ、必ずや多くの部分に於て、互に相一致するものなくむはあらず、古歌にも「わけ登る麓の道は多けれど、同ト高嶺の月を見るかな」とあり、然も徒らに嫉視反目是れ事とするが如きは、實に時勢後れの狹隘なる陋見と云はざる可らず、况んや其根本の一佛陀なる以上、互に相誹謗する

が如きは、矛盾の甚たしきものなれば也。

或は各々其依る所に多少の優劣あるが爲めに、到底一致し難しと云はん、然れども是れ吾人が最も有望なる點なりとす、蓋し其優勝を以て、眞に優勝ならしめんは、速かに共同一致し、互に大に研究發達せしむるに若くなければ也、愚者も三人集りて文珠の智恵あり、今夫各宗各派一致共同して、其尤も優勝の點を以て一丸を作らば、將來の宗教界や、其光輝燦然たるものある期して俟つ可き也。

勿論各宗統一の事たるや、決して一朝一夕容易

の事に成就せらるゝものに非ずと雖も、切めては其第一着歩として、興學制度の合併を行はんか、經費を節減し得るの點に於て、良教師を得るの點に於て、研究の具足する點に於て、其利益果して幾何ぞ、實に興學制度の合併は、興學制度の完備と云ふも差支なき也。

參 煩雜なる儀式を廢止すること。儀式は神聖なり、然れども其儀式や煩極はまつて茲に形式となる、形式は吾人が宗教に於て最も忌む所、勿論吾人は、直ちに宗教の儀式全部を廢止せよと云ふに非ず、唯其煩雜にして、實際的ならざる多くの部

分を除去して、世運と共に進化せざる可らず、但し世運の爲めに、宗義の變更を來す所以にあらざる也。

四 日曜説教の制を立つること。人或は曰はく、耶蘇教は實際的世間的にして、佛教は仙人的非世間的なりと、言や得たる哉、年一回の彼岸會盆會の説教を營むの外、殆んど世間と相距るもの、如く、講堂塵を以て蔽はれ、庭前草茫々たる佛教各宗は、到底彼の日曜安息日毎に、老若男女會堂に參集して、或は教義を浚へ、或は娛樂に歡謳するに比す可くもあらざる也。

吾人は今、彼の耶蘇教理の深淺廣狹を論及せずと雖も、彼が如く彼の社會に勢力を有する所以は、一に此世間的實際的なるに因するものにして、而してこは取りも直さず日曜説教の賜なるを斷言せんと欲す、我佛教にして社會の指針となり、先導者となり、以て日常世間を裨益せんと欲せば、是非とも日曜説教の制を立てざる可らず。

明治三十八年三月一日印刷
明治三十八年三月八日發行

定價金拾五錢

京都市下京區四洞院通五條下ル小柳町十番戶寄留

發行兼編輯人 堂屋敷竹次郎

京都市下京區鉄屋町通蛸薬師上ル坂井町十六番戶

印刷者 白木三郎

印刷所 同 文字堂活版所

京都市寺町通松原下ル

發賣元 田中種玉堂書店

全國到る所の書林に販賣せり

京都に於て最も親切
 丁寧で御客様の御参
 詣に便利なる御旅館
 は鳥丸七條上る東本
 願寺鐘堂向い角
龜屋入江誠太郎

癩病奇薬

萬病中最も恐る可きはらひ病なり
 此悪病を根治するは十全湯なり

十全湯

壹劑一週間分壹圓
 重症根治分廿五週
 輕症根治分十二週分
 豫防五週分送費不要

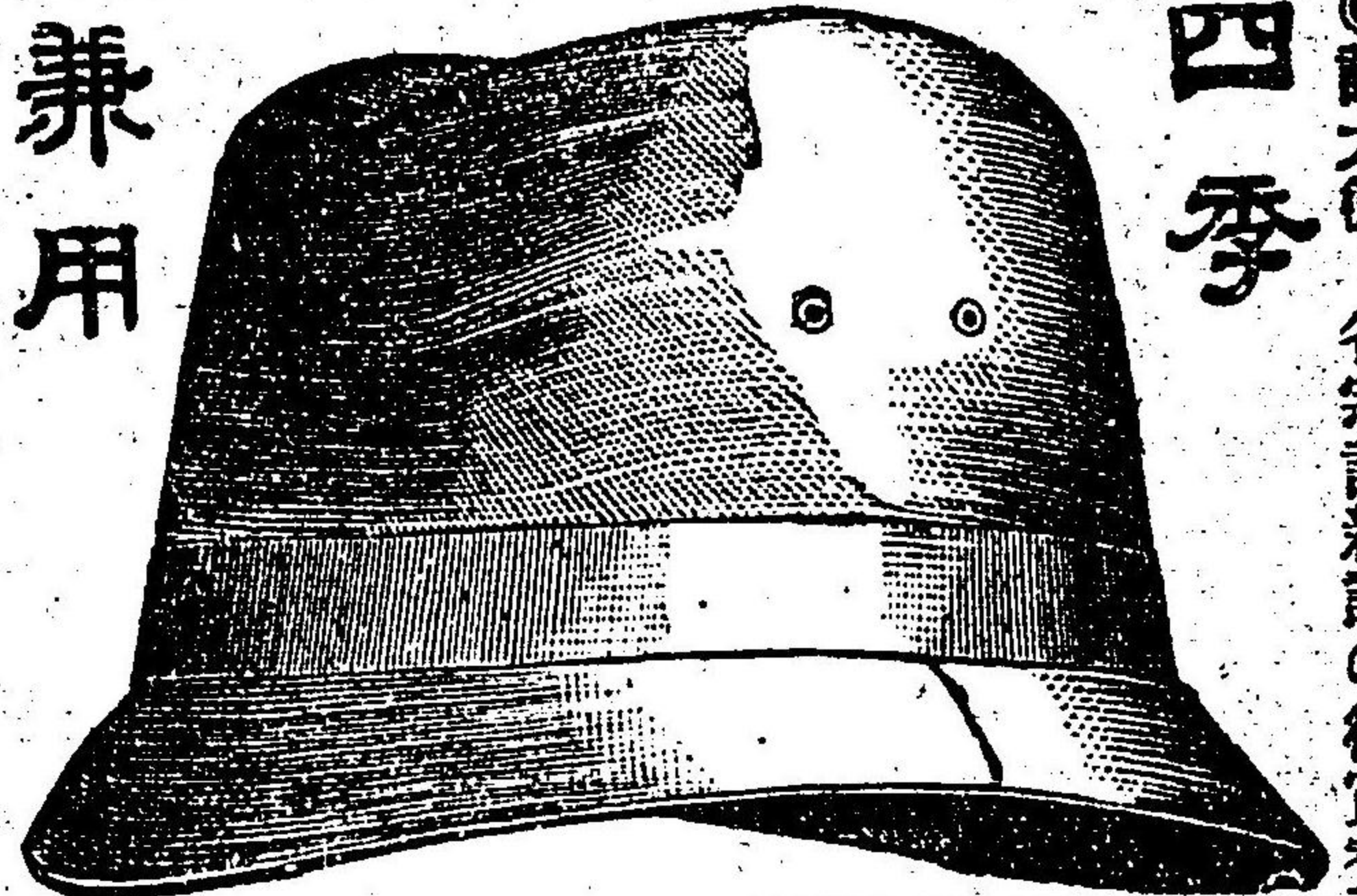
本劑は我三代の祖漢醫康郷が深く該病患者を
 救はんと苦心の結果長崎に遊學し清國名醫劉
 氏に就いて學び遂に本劑の特効あるを發見し
 之を地方患者に服用せしめたるに百發百中
 奇効あり爾來之を一家の秘法としたるを今回
 同病患者のため發賣することせり殊に本劑
 は豫防薬をして奇効あれば同病係累者又は發
 病の患ある人は本劑を服用したければ一生發病
 の患なし

京都市下魚棚通西洞院
 西入南側

發賣元 十全堂

馬鹿に輕い

佛敎各宗通用帽
 (一名燕尾帽)



帽は小形
 (普通形)
 大形の三
 種に分つ

四季

諸大徳、各宗諸新誌の御賞賛

故に御注
 文の際に
 何形と御
 明記を乞

兼用

書數百通を辱せる名譽帽たり

燕尾帽の小形は曲尺にて廻り(二尺七寸八分)普通形は(二尺八寸三分)大形は(二尺八寸八分)也

○帽子の種類多ありと雖、皆を鄙俗に
 流れ儼然たる諸賢に叶ふ者なし、仍て下
 店年來考究し、各宗諸師の御專用に適す
 る、通用帽を鑿製せし處、各位より非常
 なる御高評を賜はり、下店の光榮之に過
 ぎず、依て倍々原料を撰み無比の優品を
 調製し、普願諸徳に酬いんとす、冀くは
 陸續御費用あらん事を
 ○通用帽(一名燕尾帽)は高雅なる意匠に
 優美の體裁を具へ、形容に一種言ふべか
 らざる威嚴を備ふるのみならず、他の帽
 と異なり變形の憂ひなき實用の帽なり、
 就中構造の如きは斬新の考案にして特に
 衛生を重んじ無比の輕量とし(空氣抜き)
 (日覆袋)を添へたれば、夏季更に又清涼
 なり

京都市鳥丸通六角南入
林勘兵衛 製造販賣
 御記載な
 き分は總
 て普通形
 を送す

定價 金二圓
 品 黒一本綾羅紗地縞子夏
 質 自金巾日覆袋附木箱入
 小包 金拾五錢 五個以上無連賃
 郵税

爲換は京
 都郵便本
 局拂に御
 取組を乞

齒磨界の泰斗

タイガー歯磨

齒牙の健全を欲するの人は必ず本齒磨を使用すべし


本齒磨は京都醫科大學植木三好氏外數大
家の有効證明あり

京都市西洞院通高辻上ル

製造發賣元

布施郁春館


賣捌所は京都市内滋賀縣奈良縣下大坂府下を始め全國到る所にあり



法衣は

京都の

白菱屋



所在地は 五條室町西
電話は特の九三七

往本山用達

營業品目
西陣織物、錦、金襴、各種、法衣、調進、御、本堂、莊、嚴、品、打敷、戸、帳、幢、幡、幔、幕、旗、幟、其、他、各種、關、東、織、物、絹、紋、附、染、物、絹、改、服、各種、羅、紗、地、各種。

營業案内及相場附
は郵券封入御申感
次第直に御贈呈仕
るべく候

○大般若經六百卷全部帙入 上等紺紙金泥外題正價貳百圓 並等白外題 正價百八拾圓

●假箱荷造金四圓裏打四拾貳圓

○同 特別仕立天地本金中金欄表紙裂帙入

●無帙七圓引正價貳百六拾圓

○大般若理趣分 三枚合別仕立 代價參圓 郵稅廿錢

○例時懺法 仙過兩面摺 四拾錢 郵稅四錢

○同小理趣分 二枚合別仕立 代價壹圓廿錢 郵稅拾錢

○過去帖 巾七寸 代價貳圓廿錢 丈一尺 小包廿錢

○妙法蓮華經 大本上紙 代價參圓廿錢 小包卅錢

○勸進帖 金欄表紙 代價貳圓廿錢 有職綴仕立 錢小包廿錢

○同 小 本 上紙カナ付 代價壹圓卅錢 壹圓卅錢小包拾錢

○四度行記 五卷 正價貳圓五拾錢 小包參拾錢

○右之外佛敎に關する經疏佛具出版物に付原稿○印刷○彫刻製本等一切御注文に應じ 調進可仕候(但御注文之際は前顯代價郵稅共御送金額上候到着直に出荷可仕候也) 爲替局は(京都市二條寺町支局)宛

各宗御本山用達 京都市二條通河原町東入

芝金聲堂 拜主

染物は京都に限る

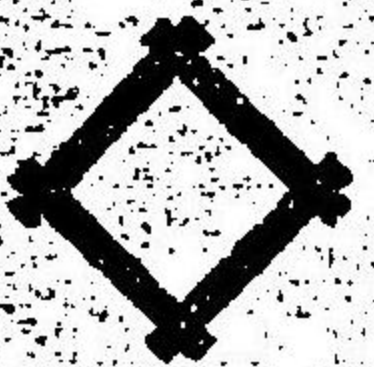
廣瀨商店は京染の特色

尙本店は確實と迅速とを以て信用を博し

業務日に月に隆盛に赴きつゝあり

御注作品は郵便にて御送付下され候へば受取證差上置き早速染方に取り掛り可申候

京都市東洞院通五條下ル二丁目



京染 色上げ 共 廣瀨商店 染直し

半身不隨

中風全治

其生が父數年來中風症にて困難の處に思議の靈藥にて全治せし故同病者に其實を告げ度し望の方は郵券三錢封入照會あれ
京都市室町新町の間三條下る 伊藤竹次郎

健胃腸痢丸

本劑は東京胃腸病院の方劑にして痢病、コレラ病、腸胃加答兒、勞瘵下痢、其他泄瀉病一切に奇効あるは諸名醫の賞用して止まざるを以て明かなり

定價 二十粒入五錢 五十粒入十錢
二百粒入廿錢 三百粒入五十錢
送料 二錢 四錢

本舖 武田都堂
京都市四條新町西入

米國製毛はへ藥名「ア」最も顯著

あるべき所に毛の無き人には毛を生し毛の發生を早め拔毛を止め眉毛の薄き人鼻のなき人はへきはの薄きを濃くしちりれ毛はくせ毛を直しく毛のつやを能くし毛をやはらかにして赤けをさり頭を冷しくさみを除く



毛白毛を黒くす常に用ひてふ

こと妙なり(遠國御注文は爲替又は代金引替)

小壘金五十錢 中壘金壹圓 送料十錢
試用金參十錢 大壘金貳圓
輸入發賣元 京都市四條通新町西 藥卸問屋 武田都堂

現代に於て理想的學生を養成せん

とするは本學舎あり

京都市烏丸通 魚棚上ル 育英學舎

本學舎は英學、數學、漢學、其他普通學を始め哲學、倫理學等に至る迄懇切
叮嚀に晝夜教授す

諸派書畫筆

製造卸

筆墨文具

諸大家用達所
各學校

各國博覽會品評會にて

金銀賞牌十五個受領

京都六角富小路角

筆墨卸 小賣商 提中金翠堂

京都市松原通柳馬場東人

小川龍枝堂

速康散

本劑の効能は脹滿、脚氣、水腫、症子、宮病、血の道、痺麻、風斯、痛風、一、手足、痛、等、年、間、不、治、の、難、症、も、本、劑、を、服、用、す、れ、ば、日、光、解、氷、の、如、く、全、快、す、る、不、思、議、の、妙、薬、に、て、明、な、り、累、代、の、實、験、に、て、

●胸の痛、いきなわ、肩のこり、そげ一切、打身、筋、違、引、風、等、な、れ、の、疲、勞、引、風、等、な、れ、ば、三、服、に、て、全、治、す、論、よ、り、證、據、必、ず、實、験、の、上、本、劑、の、妙、効、あ、る、こ、と、を、知、給、へ、藥、價、...

六服入金拾五錢、五分、日半分廿三服入金五拾錢、八分、金壹圓、卅五服入金五拾錢、十分、也、遠國の注文運賃は百、十、小包郵便にて直ぐ送る、で、小、包、郵、便、に、て、直、ぐ、送、る、郵、券、代、用、一、割、増、し、は、服、じ、事、成、共、胃、病、溜、飲、は、速、康、散、に、は、比、類、な、き、特、

實効丸

●注意 近來處々に、物多し、正眞有、速康散を、松丸中、に、そ、げ、ぬ、き、湯、川、と、あ、る、登、録、商、標、あ、り、御、買、求、の、節、は、元、祖、正、本、家、湯、川、半、左、衛、門、の、名、義、に、能、く、御、注、意、あ、ら、ん、と、を、乞、ふ、

元祖正本家 湯川半左衛門
本家出張所 湯川松盛堂
同支店 湯川松榮堂

宗諸
御
念
珠

卸 小 賣

京都五條通御幸町西入

令 嶋田清次郎

電話二一七三番

京都に於て最も親切ある旅館

京都市西六條堀川通り七條上ル大門内

石田仁平事 分 ところや茂七

御 注 意

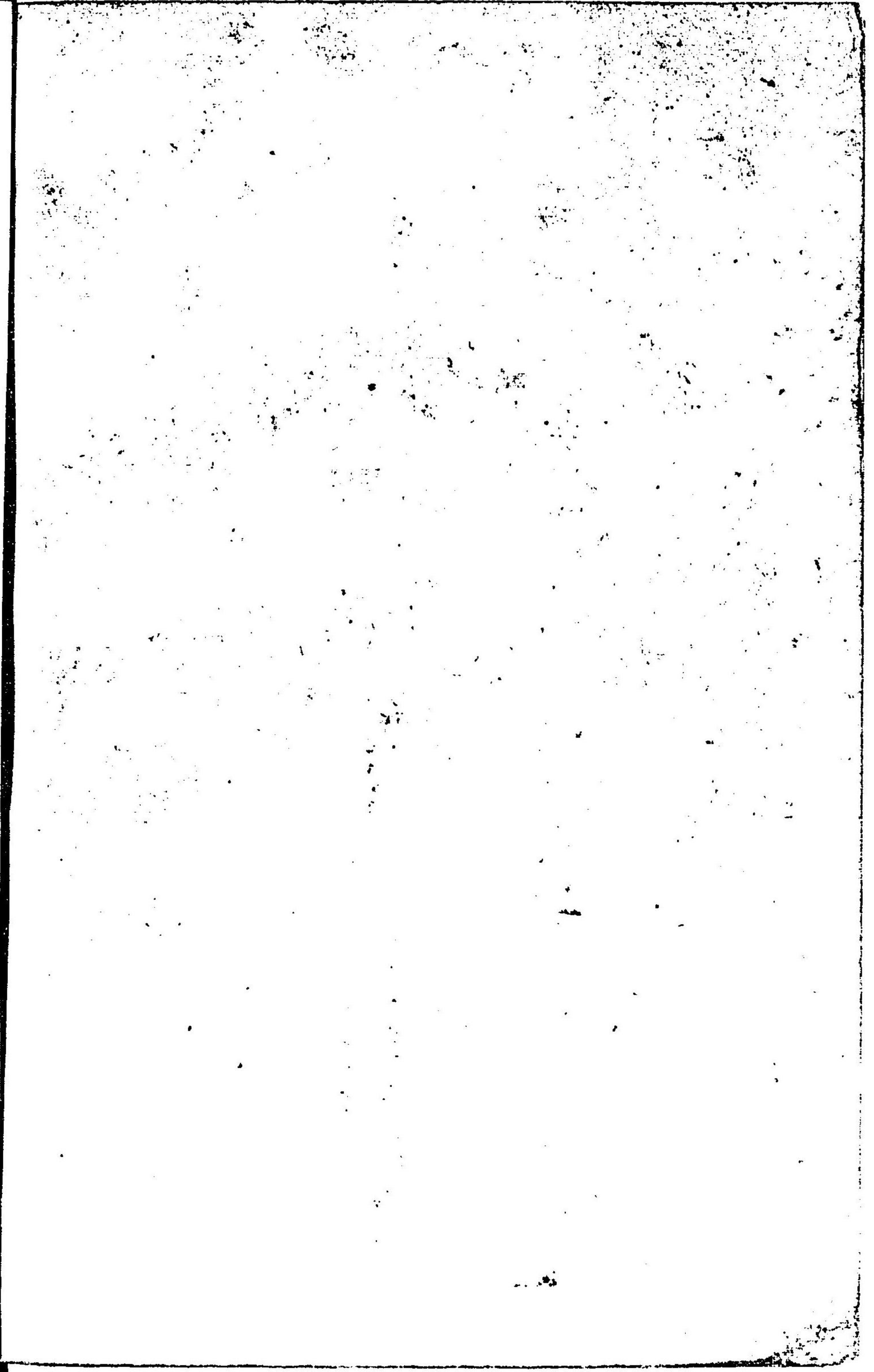
私事は迄御前通油小路角に於て營業致居り候處今般都合に依り堀川通七條上
る大門内へ移轉營業仕候間不相變御引立被下度候尙私方へ御越の節は七條停
車場より七條通りへ出で西へ堀川に至り右手の大門内東側にさとうや茂七と
相認め被下度候尙是迄よりは一層勉強致候間御參詣の節は宜敷私方へ御宿泊
奉願上候

97
257

空前絶後の大事件日露戦争に於ける我
忠勇義烈なる軍人を記念せんが爲めに
山水明媚なる京都東山梅林に於て一大
記念碑は建設せられんとす、希くは満
天下の諸彦此時奮つて此美舉に賛助を
給はんを。

丹波國南桑田郡馬路村

發起人 堤 伊之助



97
25

